

**平成18年度 修士課程学位論文要旨**

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

**軽度アルツハイマー型認知症の記憶障害に対する注意機能訓練の効果**

学位の種類： 修士（作業療法学）

保健科学研究科 作業療法学専攻 学修番号 05855603

氏名： 駒井 由起子

（指導教員名：繁田 雅弘 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

軽度のアルツハイマー型認知症者(AD)に対して注意機能訓練を行い、記憶障害や注意障害への有効性を検証した。従来の報告では記憶障害は注意機能の低下によって助長されるとされており、注意機能訓練が AD の主症状であるエピソード記憶障害を改善する可能性が推測された。研究デザインは、クロスオーバー法を用いて訓練期・非訓練期を設定した。対象者の疾患は AD で、Clinical Dementia Rating (CDR) が 0.5 または 1 で、日本版 Mini Mental State Examination(MMSE)が 20 点以上とした。介入方法は、訓練期では注意の持続・選択・分配・転換を標的とした注意機能訓練のみに限定し、非訓練期では直近の生活状況の聞き取りと、脳の働きや認知症の症状と予防についての講義の時間とし、いずれも 12 回ずつ行った。評価については認知機能全般を MMSE、前頭葉機能を Frontal Assessment Battery、記憶機能および注意機能を Wechsler Memory Scale-Revised (WMSR)、注意機能を Trail Making Test A/B(TMT)と Paced Auditory Serial-addition Task を行った。日常生活活動(ADL)と生活の質については Disability Assessment for Dementia (DAD)、痴呆性高齢者 QOL スケール (QOL-D) を使用した。評価は開始前・非訓練期後・訓練期後の 3 回行い、分析は反復測定分散分析を行った。また、進行度別 (CDR 0.5 vs CDR 1) の比較と、年齢別(65 歳未満 (若年群) vs 65 歳以上 (高齢群))の比較を交互作用の検定を用いて行った。

非訓練期と比較して訓練期に効果が示された指標は、WMSR の注意集中と TMT-B であった。また進行度別の比較では CDR0.5 群の WMSR 遅延再生、年齢別比較では若年群の QOL-D であった。DAD については合計点の有意差はみられなかった。

結果から考察されたことは次の 3 点であった。1 点目は WMSR と TMT-B は作業記憶の評価でもあり、訓練は注意機能だけでなく作業記憶を改善したと考えられた。2 点目は CDR0.5 群である最軽症の AD では近時記憶を改善したのと考えられ、認知機能がより軽度の段階から訓練を開始する方が、介入効果が期待できると考えられた。3 点目は若年群では社会的役割の喪失感が大きいとされているため、訓練が生きがいの作業活動としての役割を果たしたと考えられた。